

藤原成親と平氏

はじめに

鳥羽院最大の寵臣権中納言藤原家成の三男にして、三度もの解官を経験しながら、父を越える正二位権大納言に昇進、しかし最後は平清盛によって殺害されるという波瀾の人生を送った公卿が、藤原成親である。

彼は藤原北家の傍流末茂流に属する。この系統は、成親の曾祖父に当たる顕季が白河院の乳母子であったことから急激に政治的地位を上昇させて公卿に昇進し、代表的な院近臣家となった。その子長実・家保もともに白河院の近臣として公卿となり、長実の娘得子は鳥羽の寵愛を受けて院近臣家初の国母となった。近衛天皇の母美福門院である。しかし、長実の子孫は政治的には低迷し、かわって鳥羽院第一の近臣となったのが成親の父家成であった。家成は鳥羽の寵愛をほしきままにして、権中納言に昇進したのをはじめ、従兄弟の美福門院と結んで、多数の王家領を立荘した^①。その荘園は美門院が生んだ皇女八条院に伝領され、中世王家領の一方の柱ともいべき八条院領となったのである。

この一門は概ね大国受領を経歴し、非参議従三位として公卿の仲間入りを果たす大国受領系院近臣であった。公卿昇進に際し参議に就任し、議定などで活躍した実務官僚系院近臣である為房流などとは異なり、議政官として活動する期間は短く、院の政治的な決定などに関与することは乏しかった。成親の二人の異母兄隆季、家明とともに非参議従三位と

なつて公卿に昇進し、隆季はその後参議に就任、権大納言にまで昇進するが、家明は散三位で生涯を終えている。

これに対し、成親は仁安元年（一一六六）八月に藏人頭から参議に昇進するや、同日に従三位に、ついで一二月には、さらに数名の参議を超越して正三位に叙されたのである。年齢もまだ二九歳で、長兄隆季の公卿昇進年齢三二歳、次兄家明の三五歳を下回っていた。それまで、平治の乱などで二度も解官を経験していたことを考えれば、まさに異常な昇進といつてよい。そして承安五年（一一七五）十一月には権大納言に昇進し、ついに兄隆季に肩を並べるに至った。しかし、彼はそのわずか一年半あまり後に、鹿ヶ谷事件の首謀者の一人として非業の最期を遂げることになるのである。

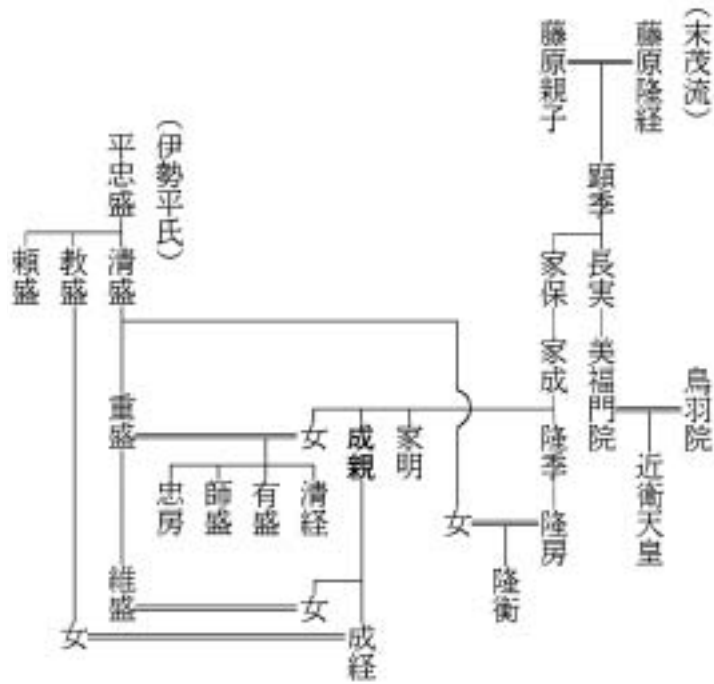
この鹿ヶ谷事件は、彼の義弟西光の知行国加賀における延暦寺との紛争を発端とし、強訴に対する平氏の対応を不服とした後白河院や西光・成親らが惹起したものである。成親はその八年前の嘉応元年（一一六九）暮れに、自身の知行国尾張における延暦寺との紛争で、強訴に対する平氏の消極的な対応から配流・解官の憂き目を見ている。さらに、最初の解官も平治の乱に関与し、平清盛に敵対したことが原因であった。

周知の通り、成親は同母妹が平重盛の室であり、重盛の嫡男維盛をも婿にしたほか、嫡男成経も清盛の弟教盛の婿となっていた。そして兄隆季の嫡男隆房も、清盛の女婿だったのである。このように末茂流は幾重

にも平氏と姻戚関係を結びながら、成親は再三にわたり平氏と対立し、ついには滅亡するに至った。以下では、その背景を検討してゆくが、具体的には、そこに介在したとみられる平氏一門内部の軋轢、後白河院と清盛以下平氏一門との微妙な関係などを解明し、当時の政治情勢の分析を目指すことにしたい。

なお、末茂流という場合には長実の系統を含んでおり、また善勝寺家という名称も未成立であるので、以下では隆季・家明・成親など家成の子孫を、家成流と総称する。

関係系図



藤原成親と平氏

1. 平治の乱と成親

(一) 保元の乱と家成流

成親の母は従二位中納言藤原経忠の娘である。経忠は院近臣の道隆流に属し、のちの坊門家の祖に当たる。兄隆季・家明の母は院近臣高階宗章の娘で、同じ大国受領系院近臣相互の婚姻であるが、このころ高階一族に公卿昇進者はなく、家格では経忠より劣っていた。成親は永治二年(一一四二)正月、わずか五歳で叙爵する。美福門院の皇女叡子内親王の御給であった。その二年後には七歳で越後守に就任、ついで讃岐守と、父家成の知行国における受領を歴任する。仁平二年(一一五二)には家成が左兵衛督を辞任して、侍従に任命されたことは、父の寵愛を示唆する。その父没後の久寿二年(一一五五)に、再度越後守に就任するが、これは兄隆季の知行であろう。やがて、後述するように越後国は成親自身の知行国となる。

家成一族の大きな特色は、大国とともに左馬寮を知行し、鳥羽院厩司であった平忠盛と連携していたことにある。かつて播磨守当時の頭季が、忠盛の父正盛を受領郎従である厩別当に任じて以来(『平家物語』巻第一)、ともに院近臣として密接な関係を保持していたことになる。ところが、保元の乱の直前に鳥羽院が死去したことから院御厩は消滅し、左馬寮も乱における勝利の立役者源義朝の手に渡ってしまった。隆季は左京大夫に就任したが、この人事は『公卿補任』に「雖無所望遷任」とあるように、不本意であったことが窺われる。そして、二年後に退位した後白河院の御厩別当には、陸奥・武蔵知行を通して義朝を統制していた藤原信頼が就任しており、王家の軍制の中心院御厩別当・左馬頭は末茂

流・伊勢平氏から、信頼・義朝へと劇的に変貌したのである。³⁾

左京大夫も父家成が帯した地位ではあるが、左馬頭こそは隆季が家成を継承して保延三年（一一三七）以来、二〇年近く在任した官職であり、左馬寮は隆季の家産となっていたといえる。これを強引に奪われた不満は小さいものではなかったと考えられるが、隆季はそれ以後、特別な動きを見せていない。彼は保元三年に非参議従三位として公卿に加わるが、すでに信頼は権中納言・檢非違使別当に昇り詰めていた。平治の乱から二年を経た保元年（一一六一）九月、ようやく隆季は参議に昇進するが、この人事について太政大臣藤原伊通は「無指奉公、家富優息（思カ）昇崇班、浅猿キ事也」と罵倒している（『山槐記』保元年一月一日条）。この言葉は、参議昇進を妨害された藏人頭藤原忠親に対するものであるから、そのままには受け取れない面もあるが、積極的な政治工作を行おうとしなかった隆季の性格を物語っている。

次兄家明は、鳥羽殿預として知られ（『山槐記』永暦元年九月二〇日条）、鳥羽院亡きあとの鳥羽の主、美福門院・八条院側近として活動し、叙位もおおむね八条院の御給によっていた。美濃・備後・播磨守、内蔵頭等を経て、保元二年に非参議従三位に昇進するという、院政期大國受領層の典型ともいべき官歴を示している。彼は参議に就くこともなく、仁安三年（一一六八）に出家しているが、姻戚関係も含めて、積極的な政治工作を示すことはなかった。彼らと対照的に、注目すべき動きを示したのが成親である。

（二）「フヨウノ若殿上人」成親

保元の乱当時、正五位下越後守兼左少将であった成親は、翌保元二年にはかつて父家成のもとで造営を開始した金剛心院の完成で従四位下に、そして内裏春興殿の造営で従四位上に昇進、翌年には右中將に昇進

した。そして保元四年正月、成親は信頼の譲によって正四位下に至り、兄家明に肩を並べたのである。この時、信頼の譲渡を受けた背景には、彼の姉妹と信頼との婚姻も関係していたと考えられる。元々、信頼の姉妹は隆季の室として隆房を生んでおり、信頼と家成の一族は相互に密接な関係にあったが、積極的に政治的連携を深めたのは成親の方であった。隆季には、左馬寮をめぐる義朝、そして信頼との確執が尾を引いていたのかも知れない。

成親は、平治の乱以前の段階で同母妹と清盛の嫡男重盛との婚姻も成り立させている。先述のように、古くから伊勢平氏と末茂流は政治的連携を有しており、隆季の嫡男隆房も清盛の女婿となっている。しかし、清盛娘を母とする隆衡の生誕は承安元年（一一七一）であり、婚姻もこれを大きく遡ることはないと考えられる。したがって、家成一門で武門の中心平氏との婚姻をまず推進したのは、成親だったのである。

平治の乱後、平清盛に捕らえられた成親について、『愚管抄』（巻第五二条）は「フヨウノ若殿上人」とする。「フヨウ」を「芙蓉」として美貌を示すとする説、また重要人物ではないことを示す「不要」とする説もあるが、平治の乱に際して、彼が「フヨウの若殿上人」でありながら、信頼に追隨しただけで深く関与しなかったとして処刑を免れたという文脈から判断するならば、岩波日本古典文学大系『愚管抄』の注記のように「武勇」の仮名書きとするのが最も意味が通る。⁴⁾ すなわち、成親には荒っぽく武士的な性格があり、武芸に通じる面があったのである。このことは、二条天皇の脱出後の緊急事態に際し、成親が信頼とともに武装して出撃したとする『平治物語』の記述からも一応裏付けられる。

当時、大國受領系の院近臣たちは、播磨守時代の顕季が平正盛を播磨の厩別当に任じた（『平家物語』巻第一）ように、有能な武士を郎従として組織し強力な任国支配を行っていた。このため、優秀な郎従を獲得す

るために有力武士との関係は不可欠であり、藤原忠隆・信頼父子のように、有力武士と緊密な姻戚関係を結ぶとともに、自らも武士的性格を帯びる者も現れた。こうした側面は、同じ大國受領系院近臣家出身の成親にも共通していたのである。

このように、成親が積極的に政界工作を行い、武士的な性格まで表出させていた背景に、政治的に無力な兄隆季・家明を超越し、家成流の中心に立とうという野心が存したことは疑いない。隆季は不明確だが、家明は鳥羽殿の主美福門院の側近であったから、二条親政派であることは明白である。したがって、成親の政治的連携の対象が、後白河院政派の中心信頼となるのも当然であった。しかも、信頼は伊勢平氏と姻戚関係を有し、義朝以下の河内源氏を従属させ、平泉藤原氏をもその統括下におくとともに、こうした武力を背景として撰閥家を牛耳っていたのである^⑤。成親は、政治秩序を根本的に改変するかのとき勢いを示し、武力という彼自身も関心のある新たな政治手段を振りかざしていた信頼に、自身の野心を賭けたのであろう。

周知の通り平治の乱は信頼の敗北となり、武装して出撃したとされる成親も、信頼とともに捕らえられた。しかし、彼は解官されたものの、配流さえも免れ、二年後には元の官職に復帰している。『平治物語』は、信頼同様に処刑されるべきところ、妹婿平重盛の嘆願で助命されたとし、『愚管抄』は先述のように事件に深く関与していなかったとして大した処罰を受けなかったとする反面、のちには「アヤウカリシ」（巻第五高倉）ともあって、生命の危険があったことを窺わせている。『愚管抄』の矛盾した記述はどのように考えるべきなのであろうか。

降伏した成親は、武装蜂起をしたことから武人として扱われ、信頼と同様に清盛に身柄を委ねられており、清盛に生殺与奪の権を握られていたことになる。武士社会の原則を適用すれば、敗北した武人は処刑を免

れない。生命の危険とはこのことを指すのであろう。ここで重盛の嘆願も行われ、蜂起に関する罪は不問に付されたものと見られる。一方、事件の謀議などでは重要な役割を果たしておらず、事件に関して積極的な供述したことから（『愚管抄』巻第五高倉）、朝廷からの処罰は解官程度の軽微なもので済んだのではあるまいか。

2. 後白河院政の成立と成親

(一) 成親の躍進

平治の乱から二年余りを経た永暦二年（一一六一）四月一日、成親は左中将に復帰した。乱の当時兼任していた越後守は、撰閥家家司として頭角を現していた藤原邦綱の手にわたっており、おそらくは撰閥家の知行国となっていたものと考えられる。成親が知行国主として再び越後に君臨するのは嘉応元年（一一六九）のことであった。

成親が政界に復帰した永暦二年当時は、二条親政派と後白河院政派の暗闘が繰り広げられていた。とくに、同年九月、平清盛の義妹平滋子が後白河院の皇子（のちの憲仁親王、高倉天皇）を出産すると、皇子のない二条天皇を退け、憲仁の即位と後白河院政の確立を目指す動きが活発となった。その中心は後白河近臣源資賢、そして滋子の兄平時忠らであった。成親もこれに同調したらしく、同年十一月二十八日（『山槐記』。『公卿補任』『百練抄』などは九月とする）、他の後白河近臣らとともに再び解官の憂き目を見ることになる。その後、二条親政段階に成親の活動はすっかりなりを潜めている。

しかし、二条天皇は永万元年（一一六五）に二三歳の若さで死去し、幼い六条天皇が即位すると、政界はにわかには憲仁を擁立する後白河の院

政に向けて加速してゆくことになる。そして翌年正月、後白河の支援を受けた成親は左中将に就任し再度の政界復帰を果たすや、六月には末茂流では初の藏人頭に就任、そして八月には参議に昇進して従三位に叙されるに至った。成親の躍進はこれに止まらず、一二月には正三位に昇り、権中納言藤原資長、左中将藤原兼房、参議藤原成頼、従三位藤原顕広、右兵衛督藤原成範らを位階の面で超越したのである。かかる急激で強引な昇進は、保元三年（一一五八）における藤原信頼、永暦元年（一一六〇）における平清盛に匹敵する。

むろん、成親がこうした破格の躍進をなし遂げた背景に、「男ノオボエ」「ナノメナラズ御寵アリケル」（『愚管抄』巻第五高倉）と称された後白河院との男色関係が介在したことは否定できない。しかし、頭中将は「執行禁中万事」（『貫首秘抄』）したとされ、天皇の側近として様々な儀式を遂行する実務的な側面も強く、有能であることはもちろん、故実の知識を必要とする。これ以前に末茂流で頭中将に就任した例はなく、成親がどのようにして故実を学んだのかは不明確だが、兄や父祖を凌駕する才覚を身につけていたことを物語る。また、公卿昇進に際して少年や院近臣など、政治的力量に劣る者が散三位に叙されるのに対し、参議に就任した者は実務能力を有していたとされることも彼の能力を裏付けるものである。『平治物語』は、成親が「仙洞の事は内外共に沙汰する仁」であったとしているが、このことは彼が単に院の寵愛を背景として権勢をふるったというだけでなく、実務的に有能であったことを示唆する記述といえよう。

さらに、彼の躍進を支えた要因として忘れてならないのは、妹婿として緊密な関係にあった平重盛の存在である。重盛の母は清盛の嫡室時子ではないが、すでに重盛は平治の乱で顕著な戦功をたてて嫡男の地位を不動としており、さらに長寛元年（一一六四）には散三位ながら公卿に

昇進、そして成親が劇的な躍進を遂げた仁安元年（一一六六）当時は正三位権中納言兼右衛門督の重職にあり、翌仁安二年五月一〇日には清盛に代わって諸道の賊徒追討権を付与されて（『兵範記』）、事実上国家的軍事警察権を掌握する立場にあり、後白河院の軍事的支柱と称すべき存在であった。いわば、成親と重盛は後白河を支える文武の両輪ともいえるべき近臣だったのである。

なお、かつて「無指奉公」などと揶揄された兄隆季も、永万元年（一一六五）に検非違使別当に就任している。別当は京中支配を担当し、行幸などの儀式を遂行する実務的な行政官という能力を必要とする官職であった。これも末茂流初のことであり、あたかも弟に対抗するように兄隆季も実務派として能力を身につけていたことがわかる。のちに安元三年の大火で邸宅が焼失した際、実定・資長・忠親・雅頼・俊経らとともに「富文書家」と称され、「隆季卿文書不残」「紙焼失」したことを惜しまれている点（『玉葉』安元三年四月二十九日条）も、彼の変容を物語る。そして、嫡男隆房と清盛の娘の婚姻を実現させ、政治的提携を実現したことも、重盛一門と結ぶ成親を意識した行動であったと考えられる。

（二）高倉即位の波紋

仁安三年（一一六八）二月、平清盛の急病という緊急事態の中で、突如六条天皇が譲位し、後白河と平滋子の間生まれた皇子憲仁が即位した。高倉天皇である。この結果、平清盛との協調の下で後白河院政が確立することになる。同年の即位大嘗祭の豊明節会に五節舞姫を献上したのは、権中納言成親、平時忠、参議源雅頼、武藏守平知盛、能登守平通盛の五名であった（『兵範記』一〇月二五日条）。村上源氏の雅頼以外は成親と平氏一門であり、高倉天皇の周辺を固める勢力を反映する人選とい

える。

この間、後白河と成親との関係も緊密さを増しており、同年七月一日、院は中御門西洞院にあった成親の泉亭に密かに御幸している(『兵範記』)。この邸宅は成親の滅亡後に後白河の院御所となっており、院のお気に入り場所であった。成親が種々の儀式の上卿を勤仕したのは当然として、ことに注目されるのは、翌年正月の熊野御幸にも公卿としてただ一人随行し(『兵範記』正月九日条)、三月の高野御幸にも姻戚関係にあった太政大臣藤原忠雅・兼雅父子、源資賢とともに供奉したこと(同前書三月一日条)である。院の最大の寵臣という立場が象徴されているといえよう。

高倉の即位で後白河院政・高倉天皇の体制は安定したかに見えた。しかし、同年十一月、高倉天皇即位大嘗祭において、高倉に対する不満が噴出することになる。退位した六条天皇はわずかに四歳、実母は徳大寺家の家司伊岐致遠の娘とされ、左大臣徳大寺実能の娘藤原育子が養母となったとはいえ外戚の弱体は否めない。退位も当然のように思われるが、しかし清盛の重病を耳にした右大臣兼実が「前大相国所勞、天下大事只在此事也。此人天亡之後、弥以衰弊歟」(『玉葉』二月一日条)と、清盛の死去が朝廷の衰退・混乱をもたらすと記しているように、六条を擁護し、高倉即位に反発する勢力は小さいものではなかった。そもそも六条天皇は八条院・閑院流が支援する正統王権二条の系統に属す上に、八条院の猶子以仁王という六条に代わる皇子も存在していた。その上、高倉の母は前代未聞の平氏の出身であり、平安時代で初めての藤原氏・皇女以外の国母の出現に反発する動きも見られたのである。

大嘗祭の重要儀式の一つ五節の帳台試において、こともあろうに内大臣右大将の源雅通と、大納言左大将の藤原師長が途中退出するという不祥事が発生、激怒した後白河は両者の解官を命ずるに至った。これを聞

いた蔵人頭平信範は、安和の変における源高明や、長徳の政変における藤原伊周の先例を記しているほどである(『兵範記』仁安三年一月二日条)。雅通は同年三月に皇太后となった滋子の初代大夫、師長は八月にその後任に就いており、むしろ表面上は滋子に近い立場でありながら、あえて高倉の正統性を否定するかのような行動に出たことになる。後白河の憤激も当然である。雅通は、養父雅定の代から美福門院と緊密に提携して政治的地位を保持しており、美福門院・八条院の支援する二条皇統の断絶に内心憤慨していた可能性もある。師長の事情は判然としないが、藤原氏を退けた平氏出身の国母の登場に反発を感じたのではないだろうか。

不満を露にしたのは、藤原氏や村上源氏の公卿だけではない。十一月二八日、後白河は尾張守平保盛と、その父参議平頼盛が有した五カ職の解官を命じている(『兵範記』)。両者は五節参入以下に出席しなかったばかりか、代始の母后入内をも無視して厳島参詣に出立し清盛に制止される始末。さらに、頼盛が大式として支配していた大宰府管内で大嘗祭の所課を拒否したばかりか、不法な賦課を行ったという。頼盛は八条院の女房を妻とし、多数の八条院領において預所・領家を勤仕するなど、八条院と密接な関係を有していた。したがって、頼盛の行動が単なる気まぐれであろうはずはなく、明らかに滋子・高倉に鋭く反発したものと考えられる。また、彼には異母兄の清盛に対抗する意識があり、清盛がその室の妹滋子を通して権威を高めることに不満を抱いたのであろう。

さらに、元来清盛を中心とした平氏一門主流は二条親政を支持しており、憲仁(高倉)・滋子を支援した教盛・時忠などは一門内部の異端であった。ところが、二条天皇、そして六条天皇を支援した摂政基実の相次ぐ夭折から、清盛も急遽後白河と提携し、高倉擁立に同意した経緯がある。それだけに、頼盛は憤懣を露わにしたものと考えられる。師長・

雅通の解官は一月足らずで許されたが、頼盛の解官は一年に及んだ。しかも、一月一三日には左衛門尉藤原季経以下の頼盛家人までが解官の憂き目を見ている（『兵範記』）。そして彼が大式として知行していた大宰府は坊門家の信隆、そして息子保盛を受領としていた尾張国は成親と、それぞれ後白河近臣に与えられることになった。その尾張国で、重大な事件が勃発するのである。

（三）嘉応の強訴

二月一七日、藏人頭平信範のもとに延暦寺所司からの要求が突きつけられた（『兵範記』）。それは延暦寺領美濃国平野莊住人を凌辱した尾張守藤原家教の目代政友と、知行国主藤原成親の配流を求める内容であった。これが信範自身をも巻込むことになる大事件の発端だったのである。ここで注目されるのは、頼盛知行から成親知行に代わった尾張で、成親の弟尾張守藤原家教の目代政友と、平清盛と友好関係にある延暦寺・日吉社勢力とが衝突したことである。衝突の直接の契機は些細なことであったとされるが、知行国主の交代は支配体制をも大きく改変し、莊園の停廃等の紛争をも惹起する。とくに尾張は清盛の父忠盛も受領に就任したことがあるし、平治元年に頼盛が受領となって以来、一貫して平氏一門が知行してきただけに、知行国主交代の軋轢も大きかったのではないだろうか。

二月二三日、知行国主成親の配流、目代政友の禁獄を求めた強訴が勃発する。ところが、神輿を擁した悪僧・神人たちは、通例の院御所ではなく、警備の手薄な内裏を襲撃したのである。元来内裏に常駐していた平経盛・源頼政・同重貞らの僅かな武力では、強訴を撃退することなどとうてい困難で、内裏は悪僧らに占拠され神輿が放置されてしまった（『兵範記』）。むろん悪僧らの戦術的な勝利に他ならないが、反面、内裏

を蹂躪した行動には、高倉天皇を脅かし、その権威を否定する側面もあったと考えられる。高倉天皇に反発し、尾張知行を奪われた頼盛に連携する側面も窺知できるだろう。

これに対し、平氏の精鋭部隊ともいべき重盛・頼盛・宗盛の率いる約五百騎が投入されることになったが、公卿議定で夜間の追捕は神輿損壊などの恐れがあるとの意見が強く、また重盛の慎重な態度によって攻撃は回避された。この結果、事態収拾のため、後白河も成親の配流を認めざるを得なくなったのである。攻撃に向かう平氏軍のうち、約三分の一にあたる一五〇騎は当事者ともいべき頼盛の軍勢で、成親と連携する重盛の軍勢二〇〇騎に対抗しうる勢力であった。頼盛は直前の一月に政界復帰したばかりで、尾張を奪われたことに対する憤懣も消えてはいなかったであろう。頼盛は在京平氏軍の中で第二の勢力を有しており、その力を借りなければ強訴への対応は困難であった。頼盛の立場を考慮すれば、重盛が慎重になるのも当然といえる。

当初、強訴への妥協はあり得ないとした後白河院も、強訴に屈する形で成親の備中への配流を認めるに至った（『玉葉』二月二五日条）。しかし事態は急転、後白河は成親を呼び戻し、「奏事不実」を理由に藏人頭信範と、検非違使別当で院との取次ぎも担当していた平時忠の両名を配流するという理不尽な方策をとったのである（『玉葉』『兵範記』二月二八日条）。成親をあくまでも擁護するとともに、平氏一門に対する報復を行うものであった。ここで注目されるのは、翌嘉応二年（一一七〇）正月六日、それまで時忠が帯びていた検非違使別当を成親に与え、世間の耳目を驚かせたことである（『玉葉』）。

別当の座は、先述のように三年間にわたり成親の兄隆季が在任したのち、嘉応元年になって時忠が就任し、平治の乱後の清盛以来久しぶりに平氏一門の手に渡っていた。成親の別当補任は京の治安維持を全面的に

は平氏に依存しないこと、そして成親自身に一応の防御の権限と武力を与えることを認めたものといえる。後述のように延暦寺の抗議で成親は解官されるが、嘉応二年四月に別当に復帰し、彼が権大納言に昇進するまで、歴代の検非違使別当で最長の五年間にわたって、その地位を独占したのである。平清盛を頂点とする平氏軍制に対抗するかのようになり、成親を中心とする京の警察体制を構築しようとしたことになる。

事態は正月に清盛が上洛して後白河と面会した結果、成親の配流、時忠・信範の召還で決着がついた〔『玉葉』正月二三日条〕。むろん成親の再度の配流は、延暦寺を懐柔するための名目にすぎず、実際には一時的な解官にとどめられた〔『公卿補任』〕。四月十九日、後白河と清盛は南都に赴き、かつての鳥羽院と藤原忠実の先例に倣って同時に受戒した〔『玉葉』〕。両者の協調が内外に誇示されるなか、二日後の二二日、重盛が権大納言に復帰すると同時に、成親は権中納言・検非違使別当・右衛門督に、そして信範の一族も元の地位を回復した。一応、事件は落着し、後白河院と平氏の協調関係も復活したかのごとくであった。

しかし、検非違使別当は時忠の手から成親にわたっていたし、尾張国も頼盛に戻ったわけではなく、院近臣藤原修範の子範能が受領に就任、院近臣系統の支配が継続していた。また、平時忠の配流にともない息子越後守時実も解官されたが、その後任は後述するように成親に近侍していた平信業であった。結果的には、成親が事件の混乱の中で時忠の知行国を奪ったことになる。こうした事態の背景には、平氏一門の躍進による官職独占にともない、必然的に院近臣との軋轢が生じつつあったことが伏在していた。後白河は事件を利用して、平氏一門の官職や知行国を成親以下の院近臣に与えていったのである。後白河と平氏一門との軋轢は、当然ながら次第に激化してゆくことになるのである。

3. 平清盛との衝突

(一) 寵臣成親

尾張国をめぐる延暦寺の強訴が終息すると、何事もなかったかのように、成親も平氏一門も後白河院に対する奉仕に努めることになる。承安元年（一一七二）一〇月、後白河院は前年に引き続いて平清盛の福原山荘に御幸した。この時に随行した公卿は、重盛・宗盛・時忠の平氏一門と、資賢・兼雅、そして成親であった〔『玉葉』一〇月二三日条〕。さらに、帰京した後白河は、「福原家賞」として清盛家人の藤原能盛、平盛国、平貞綱を正五位下に叙し、盛国を検非違使に任じている〔『達幸故実抄』〕。盛国は検非違使別当成親のもとに属することになる。

この盛国は、本来伊勢平氏の傍流の出身であったが、当時は平氏一門の郎等となっていた。平清盛が盛国の九条河原口の邸で死去したように〔『玉葉』治承五年閏二月四日条〕、清盛の腹心中の腹心であり、同時に重盛のもとで家人を統制する侍所別当のごとき役割を果たしていたとされる〔『平家物語』〕、平氏家人の中心的存在であった。従来、重盛の腹心平貞能が検非違使に加わっていたが、他の追捕尉は西光の子藤原師高や藤原能盛（平氏家人とは別人）、大江遠業をはじめとする北面下臈が多く、武力としては必ずしも強力とは言えるものではなかった。盛国の加入で使庁と平氏との結合は深まり、検非違使の追捕尉の武力は大きく強化されたと考えられる。

また、一月三日、後白河は密かに成親の五辻亭を訪れ、競馬を行っている。その翌日には重盛の六波羅邸を訪れるという噂が流れている〔『玉葉』〕。依然として後白河にとって、成親と重盛こそが院政を支える近臣でありつづけたのである。その翌月、徳子が高倉に入内し、平氏と

後白河の蜜月は絶頂を迎えている。

このころの成親にとって最大の出来事は、承安二年（一一七二）七月二二日の院御所三条殿の造営に他ならない。『玉葉』同日条によると、この勳賞で成親自身が従二位に叙されて、上臈の源資賢・花山院兼雅を超越している。資賢も院近臣の中心的存在だし、兼雅は太政大臣忠雅の子息、しかも清盛の女婿という「権門」である。そればかりか、成親が知行する越後の受領平信業と、同じく知行国丹波の受領成経が重任を許された上に、二カ国の遷任が認められている。すなわち、成親は「五カ事」の恩賞を与えられたのであり、九条兼実には「未聞」の事と評されるのも当然であった。

ここで注目されるのは、成親の功績によって二カ国の受領が重任を、さらに二カ国が遷任を認められたことである。これらの国々は当然成親の知行国であり、彼の知行は四カ国に及んでいたことになる。この数は院近臣としては最大のものであり、摂関家にも匹敵する。重任となったのは越後守平信業、そして丹波守で嫡男の成経である。また、遷任を認められたのは、承安元年一二月に三河守在任が確認される弟盛頼と、翌年近江から信濃へ遷任した息子実教の兩名と考えられる。^⑧ こうしてみると当時の知行国は越後・丹波・三河・近江という熟国・大国ばかりであり、成親の莫大な経済力が推測される。

このうち、丹波は仁安二年（一一六七）六月段階で弟盛頼の在任が確認されており、これ以後も鹿ヶ谷事件に至るまで成経が受領の地位にあった。同国こそは成親が一〇年余りも継続して知行した、最大の経済的・政治的基盤といえよう。一方、越後はかつての自身の任国でもあり、古くからの縁を有した国だが、信業は重任の翌承安二年に離任し、成親の男親実に代わっている。信業は承安四年には尾張守在任が確認されており、同国に遷任したものと考えられる。その後、尾張守は弟盛頼に移

り、鹿ヶ谷事件まで在任していた。成親の尾張国に対する強い執着が窺知される。長期に渡る尾張知行が、同国の武士団との連携を生じたことはいままでもない。尾張の有力豪族原高春（『吾妻鏡』元暦元年三月一三日条）や大屋安資（『吾妻鏡』養和元年三月一九日条）が早くから平氏に反発したことは、成親が同国の武士の組織化を図った可能性をも示唆する。

一方、受領のうち、越後守平信業は成親の一族ではなく、『平家物語』にも登場する後白河の下北面で、今様に通じた上に姉坊門局が後白河の寵愛を受けたことで官位を上昇させていた。成親は、この信業を家司等として組織していたことになる。信業は鹿ヶ谷事件には連座しておらず、事件以前に成親の下を離れたと見られるが、周知の通りともに首謀者として殺害される西光を義弟としたことなどを考え合わせると、成親は院下北面の統合者という性格を有していたのではないだろうか。成親が長年検非違使別当として下北面を統率していたことも、こうした立場と関係したものと考えられる。

後白河は、元来「武勇」と称される武的な性格を有する成親に下北面を組織させ、平氏とは別個の武力・警察力の統率者とする構想を有していた可能性が高い。そして、成親が阿波国の在庁官人近藤氏出身の西光と結んだことは、近藤一族と敵対する田口成良を腹心とした平清盛との対立を不可避とした。

（二）官職をめぐる軋轢

その後も成親は、後白河の第一の近臣として様々な儀式で活躍していた。そして翌承安三年（一一七三）四月には、石清水・賀茂行幸の上卿を勤仕した恩賞として正二位に昇進、その二年後の承安五年には、平清盛の盟友藤原邦綱を超越して権大納言への昇進を果たした。この地位は兄隆季に並ぶものであり、成親の念願ともいべき家成流嫡流の奪取は

目前となったのである。このことは、隆季と結ぶ清盛との対立を深める一面もあった。権大納言は、王家の縁戚であった平氏一門を除けば、それまで院近臣家出身者が到達しえた最高峰であった。彼が清盛に対抗しようという野心を抱いたとしても、不思議ではない。

この当時の公卿上層部をめぐる人事には、微妙な政争の影がつきまっていた。承安四年七月、すでに体調を崩していた内大臣源雅通が辞退した右大将をめぐって、平重盛と藤原兼雅が競い合い、清盛の圧力もあって重盛がその座を得た（『玉葉』七月九日条）。兼雅も清盛の女婿であったが、後白河の側近でもあった。清盛は後白河側近を退けて、嫡男の大将補任を実現したことになる。近衛大将は、征夷大將軍をはじめとする「大將軍」が通常設置されない当時においては武官の最高峰であり、また摂関家・大臣家以外に就任しえない榮譽ある官職であった。大臣家としての地位を確立し、武門の頂点に立つ平氏としては何としても入手したい官職であったに相違ない。

ついで同年八月には、平清盛が摂関家の後継者に指名した、故摂政基実の嫡男基通が従三位に叙されている。彼は、摂関家嫡男の象徴五位中將^⑨にこそ任じられなかったものの、従四位上から正四位下・上を超越しての三位昇進で、兼実は摂関家の面目と称している（『玉葉』八月二日条）。撰関の地位をめぐり、自身の子孫への継承を望む現職の関白基房、後述するように後白河に急接近していた師長らと、平氏一門との緊張関係がかいま見ることができるといえる。

翌承安五年二月、嘉応元年以来病気で籠居していた内大臣源雅通が五八歳で死去したにもかかわらず、筆頭大納言にして左大将でもある藤原師長の内大臣昇進が長らく実現しなかった。兼実は、師長の昇進にともなう後任の権大納言をめぐって、成親と邦綱が激しく対立していたためと推測していた（『玉葉』六月一〇日条）。結局、一月に師長が内大臣に

昇進すると、先述のように成親が邦綱を超越して権大納言に昇進することになる。ここでも平氏に近い邦綱と、院近臣成親との対立という構図が存在している。

こうした緊張関係が高まる中、安元二年（一一七六）七月に清盛と後白河との調整役建春門院が死去したことで、人事の対立がより先鋭化したことは言をまたない。同年十二月の蔵人頭をめぐる藤原光能と、清盛最愛の息知盛との対立と前者の勝利（『玉葉』一一月五日条）はその所産である。なお、『平家物語』で知られる右大将をめぐる成親と宗盛との抗争については、虚構の可能性が指摘されている^⑩。源頼朝以前における近衛大将の任官は、原則として大臣家以上の子弟に限られており、唯一の例外で保延五年（一一三九）に右大将に就任した権大納言藤原実能も、当時の崇徳天皇の外戚であった。太政大臣に昇進した平清盛さえも補任されていないのである。したがって、外戚でもない成親が補任される可能性はほとんどなかったものであり、虚構説を支持すべきと考えられる。おそらくは、成親の滅亡と、平氏と院近臣との鋭い対立を結び付けて形成された挿話であろう。

ところで、大臣に昇進した師長は、かつて成親が造営した後白河院の三条烏丸御所で任大臣の大饗雑事を定めるなど、すっかり院近臣となっていた（『玉葉』『公卿補任』）。このことと、彼が成親の娘婿に迎えられていたこととは無関係ではない。さらに、男子のなかった師長は成親の息子成宗を養子としていた程である（『玉葉』安元二年七月二九日条）。成親は下北面のみならず、院に近侍する上流貴族とも密接な姻戚関係を有し、その結節点ともいえるべき立場にあった。

さらに、建春門院の死後、後白河は自身の幼い皇子を高倉天皇に養子を迎え、天皇の退位作業を開始した。高倉が退位すれば、清盛と王家との関係は断絶することになる^⑪。後白河の下で、平清盛を王権から排除し

た新たな朝廷の中心となるのは成親以外に考えられない。後白河院と清盛との政治的決裂という情勢の下で、清盛と成親は王権から地方武士の組織にわたる様々な側面で、鋭く対立したのである。かくして、両者の全面衝突である鹿ヶ谷事件が勃発することになる。

(三) 鹿ヶ谷事件

安元三年(一一七七)四月、延暦寺・日吉社に属する加賀国白山宮と加賀守藤原師高、弟の目代師経との衝突を契機として、師高らの配流を要求する延暦寺・日吉社の大規模な強訴が閑院内裏を襲うことになる。師高兄弟は、後白河の側近にして成親の義弟西光の息子であった。今回は平重盛との連携も機能し、彼に属する平氏軍らが強訴を撃退したが、神輿に矢が刺さるという不祥事が発生し、当事者である重盛の家人らに処罰せざるを得ない事態となった。このため、さすがの後白河も師高らを擁護することができず、配流を余儀なくされたのである(『玉葉』四月一五・二〇日条等)。もともと、配流先は成親の知行国尾張であるから、形式的なものに過ぎなかった。

その後、平氏一門の防禦に対する姿勢は消極的なものとなり、安元の大火や中宮庁への強盗事件、そして天台座主明雲の配流と大衆による奪回という前代未聞の事態が相次ぐことになる。ついに業を煮やした後白河は平清盛を京に呼び寄せ、延暦寺攻撃を命ずるに至った。清盛は政治的に連携してきた延暦寺を、多大の犠牲を払って攻撃するという深刻な事態に直面したのである。しかし、六月一日、清盛は突如として院近臣たちを追捕した。その中心人物西光を拷問の上に斬首、そして成親を解官もしないままに備前国に配流し、同地において殺害した(『玉葉』六月二日条など)。解官・配流は院下北面、成親の知行国の受領たちに及んだ(『玉葉』六月四・一八日条)。清盛と、後白河と彼を支えてきた成親との

対立が、ついに激発したのである。

これまでの経緯を考えれば、成親と清盛との衝突は必然的な事態といえる。しかし、問題は平清盛が現職の権大納言という高官を、私刑によって殺害した点である。成親を配流ではなく殺害した背景には、彼が武的な性格を有したことも関係するだろうが、同時に何としても彼を抹殺しようとした清盛の強い意志も看取される。配流では後白河の政治力によつて復帰する可能性が残るため、清盛は成親を武人と同様に処刑したものと思われる。では、清盛にそうした行動をとらせた背景はどのようなものだったのか。

西光は、清盛を「危め」ようとした謀議があったことを承服したという(『玉葉』六月二日条)。むしろ『平家物語』などの説くように、多田行綱らの武力による平氏打倒を企図したとは考え難いが、清盛を延暦寺との衝突に追い込み、両者の提携を破壊するとともに、平氏の武力を損耗させ、清盛の名誉や政治的地位を失墜させようとしたものであることに疑いはない。そればかりか、後白河は近江・越前・美濃三か国から武士の交名注進を命じており(『玉葉』五月二八日条)、院権力による地方武士の動員の動きもみられた。こうした武力は、おそらく人数に限界がある平氏の家人を凌駕するものであり、延暦寺攻撃の忌避、そして院権力との全面衝突は清盛を危機に追込む恐れもあったと考えられる。

しかも、三か国のうち越前は平重盛の知行国であった。彼は強訴迎撃にも出撃するなど、嘉応の強訴とは異なり後白河や成親と共同歩調を取っていただけに積極的な武士の動員もありえた。重盛は一応引退していた清盛に代わる平氏の代表であり、すでに内大臣・左大将に栄進していたものの、その立場は微妙であった。彼は院と清盛との対立に際し、つねに家長清盛への従属を余儀なくされていたし、今や清盛の正室となった平時子の長男で、建春門院とも密接な関係を有した宗盛が台頭し、独自の

政治的地位を築きつつあった。また、重盛は元来平氏の最精鋭部隊ともいべき平貞能・伊藤忠清一族を統率し、平氏軍制の中心に君臨していた。しかし、清盛が福原に拠点を構えて以後、阿波出身の田口成良、紀伊出身の湯浅一族などの新たな勢力が台頭し、京・畿内の軍事活動に活躍するようになっていた。^⑬このように、重盛は次第に平氏一門の中で比重を低下させ、不満を募らせていたのである。それだけに重盛が成親や後白河院と連携した軍事行動に出るならば、清盛から自立し、ついには平氏一門を分裂させる危険性も孕んでいたといえる。

こうした危機を回避するためには、院権力の形骸化を図る必要があった。それ故に清盛は首謀者で武士出身の西光のみならず、後白河院の政治的支柱にして、反清盛勢力の結節点ともいべき成親の殺害に踏み切ったのである。

むすび

事件の激震が続く六月五日、重盛は左大将を辞任した。盟友成親と父の信頼をも失った彼には、武門の頂点という地位を保持することは困難だったのである。「トク死ナバヤ」〔愚管抄〕巻第五高倉

と口走った重盛の死去は、わずか二年後であった。その後の小松殿一門が辿った無残な運命については周知の通りである。

腹心成親を失った後白河は、それでも挫けなかった。今度は関白藤原基房と提携し、摂関家領を清盛の手から奪取しようとするに至った。しかし、成親に続き、重盛をも失った後白河は、清盛の前には無力であった。院政停止という空前の事態が勃発するのは治承三年十一月のことだったのである。

注

官職の変動については、公卿は『公卿補任』に、檢非違使は宮崎康充氏編『檢非違使補任第一』に、また受領の人事は菊地紳一・宮崎康充氏編『国司一覽』（『日本史総覧Ⅱ』所収）によった。

① 高橋一樹氏「王家領荘園の立荘」（同氏著『荘園制の成立と鎌倉幕府』所収、塙書房、二〇〇四年、初出は二〇〇〇年）。

② 高橋昌明氏著『増補改訂 清盛以前 伊勢平氏の興隆』（文理閣二〇〇四年）。

③ 拙著『保元・平治の乱を読みなおす』（日本放送出版協会、二〇〇四年）。

④ 永原慶二氏編『日本の名著 9 慈円・北畠親房』における『愚管抄』の現代語訳では、「何ということもない」と訳し「不要」説を採用している。また、「フヨウ」に濁点がない点も「武勇」説の弱点といえる。

⑤ 拙著注③前掲書。

⑥ 高橋氏注②前掲書。

⑦ 佐伯智広氏「徳大寺家の荘園集積」（『史林』八六卷一号、二〇〇三年）

⑧ 実教はすでに養子となっているし、時期もずれる点でやや躊躇される。

⑨ 拙稿「五位中将考」（大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質 古代・中世』思文閣出版、一九九七年所収）参照。

⑩ 日下力氏「『平家物語』成親事件話群の考察」（同氏著『平治物語の成立と展開』汲古書院、一九九七年所収、初出は一九八二年）。

⑪ 高倉退位問題については、拙著『平清盛の闘い 幻の中世国家』（角川書店、二〇〇一年）参照。

⑫ この点については拙稿「王権守護の武力」（蘭田香融先生古稀記念論集『日本仏教の史的展開』、塙書房、一九九九年所収）参照。

⑬ 拙稿「福原遷都と平氏政権」（『古代文化』第五七巻第四号、二〇〇五年）参照。

（京都大学大学院人間・環境学専攻教授）